

## 困ったな、いくらで売ればいいんだろう。

帰国前情報(1)

私達が買い集めた家財道具は、基本的に後任に引き継げるといいのだが、私は増員で来たので前任者がおらず、在外赴任のために240万円もの融資を受けた(但し1年半で全額期限前返済した)身である。内示を受けた後、これまで集めていた領収書を整理して、いくら使ったのかをはじいたところ、車を除いても200万円以上使っていることが判明した。

悩ましいのは、これをいくらで売るかということだ。ここに住んでいると、先に帰任された所員や日本人専門家の方々が何をいくらで売り払ったか、誰が辛くて誰が甘いか、いろいろ聞こえてくる。長年住んでいた人なら5割掛けだと何も言われないが、任期2年の専門家が7~8割掛けで後任に売ったとか、某所員は後任の所員に原価で売ったとかいう話には、「○○さんは辛い。」という評判が付いてきて、自分が帰った後に同じことを言われるのは嫌だなと思ったりもする。

3年住むなら5割掛けにしたいところだが、任期が2年7ヶ月となると、電圧変動で消耗が激しい電化製品は6割掛け、食器や家具といった耐久消費財は7割掛けで勘弁してほしいという気にもなる。しかも、これは原価に対しての割引率を言っているだけで、日本から持ってきたアナカン荷物で60万円(私の赴任時と美澄呼び寄せ時の2回)、車の輸送で40万円を余分に払った点は計算に入っていない。だから、これらの値段設定は自分達は妥当だと思うのだけれど、それでも帰任後にいろいろ言われるだろうなと思うと、あまり気分の良いものではない。その点、欧米人はドライで、スーパーマーケットやアメリカンクラブの掲示板で見かける「売りたいし広告」では、殆ど仕入原価そのままの売却希望価格を表示している。

勿論、私が大学入学時に買った電気炊飯器は、16年のヴィンテージものだがただにするのは当然のこと。高校3年の冬に買ったジャケットはKCに無償譲渡するし、長年着込んだ衣類もガレージセールで出血大放出するつもりだ。物持ちの良い私としては愛着ある品の数々を当地に残して帰るのは心苦しいばかりであるが。(浩司)

## 寝返りがうてるようになりました

樹生君の近況報告(その4)

樹生が9ヶ月になった日、気が付くと樹生は横向きに寝ていました。それまで上向きでしか寝れなかったのに横向きに寝れるようになったんだと思った翌日、今度は寝返りをするようになりました。それからです、今まで寝かせておくと動かなくて安心だったのが、寝かせていても起きあがって立ち上がりベッドの柵に掴まっているではないですか!それだけではありません、寝かせていても自分で起きあがれるため、気が付くとあっちに行きこっちに行き、いたずらをしまくっています。歩行器にも入れるようになり、行動範囲が広がり嬉しそうに駆け回っています。

おむつを替えるときも一苦労、体を反らせて動くのでとても替えにくいです。今こうしてワープロを打っている間も、ストープに掴まりバンバン叩いています。初めは怒っていたのですが、命に危険はないので飽きるまでやらせることにしました。こんないたずらはまだ序の口と思うと日本に帰ってからが思いやられます。

樹生は岐阜の祖父母が来る前と後では随分やる事が変わりました。家の使用人も知恵がついたと言っています。これからはもっといたずらをするのでしょうか。程々に願いますよ。(美澄)

## バナナはいらんかね~

ネパールの物売り達

「バナナ、ミカン、リンゴ~」「ジャガイモ、玉葱、カリフラワ~」など、毎日我が家の周りでは物売りの声が聞こえてきます。「マディジェ(あまり良い呼び名ではないらしい)」と呼ばれるインド国境付近から働きに来ている色黒で布を腰巻きのように巻いた服を着た男性が、よくあんなに運べると思うぐらい重たそうな数10kgの品物(野菜、果物、魚など)を自転車や頭に載せて売り歩いているのです。家の近くまで売りに来てくれる分高そうですが、彼等は店を構えていない分安く売ります。また、1日中売り歩き疲れるのか、夕方の方が残りを安く売るようです。

大声で売り歩いているところを呼び止めて、「ジャガイモ1kgいくら?」と値段を聞き、たいい高めに値段を言うので値下げ交渉をし、欲しい量を量ってもらいます。この時悪い品物を混ぜていないか、水増しして計っていないかをきちんと見ておかないと安く買ったと喜んで逆高くつくこともあります。この駆け引きが大切なのです。私はたいいお店に行っても買い物をしますが、住み込みのKC達は外に行くことが少ないので専らマディシェ達から買っています。ネパール料理に使われる食材は限られているのでそれで十分なようです。こういう物売りは、わざわざ買い物に行き重たい荷物を運ばなくて良いので便利です。また野菜果物以外にも日本のちり紙交換のような新聞雑誌、空き瓶などを回収して回る人もいます。マディシェ達はこうやってネパールの生活を支えているのです。(美澄)

## 取りあえず、住所は多摩になりました。

帰国前情報(2)

5月の帰国に向けて、先ずは自分達が帰国後住む場所を確保しなければならないということで、3月1日の内示後すぐに職員借上住宅入居申請を行なった。先日届いた回答によると、場所は多摩市で京王線聖蹟桜ヶ丘駅から徒歩3分。多摩川、動物公園、そして高雄山に近い。樹生を育てるにはまずまずの土地だろうと思う。

新配属先は公式には未定。多分あそこだろうと予想はついているけれど、5月1日の帰国発令までのお楽しみだ。(浩司)

## 私の仕事紹介（その23）

私の仕事を振り返るのは未だ時期尚早だとは思いますが、この2年7ヶ月の在外生活の中で辛かった仕事は何かと聞かれば、明らかに「チサパニ村落開発・住民防災計画」という新規事業の立ち上げだったと思う。最後にして最大のイベントだったものの、私の帰国後これを担当する所員は大変である。おそらくプロ技3件同時に担当するよりもはるかにキツイ仕事だと思う。

この事業がダメと言っている訳ではない。むしろこうしたローカルNGOと契約結んで事業実施してもらおうプログラムは、今後JICAが本腰を入れて地方開発や貧困撲滅といった課題に取り組むとしたら必要不可欠だとすら思う。だから、昨年4月にこの予算が認可された時は手放しに喜んだ。全世界で5件しか採択されない新規予算をなんとかネパールに持って来たかった。幸い「チサパニ」が採択され、帰国する所員から私が事業立ち上げを引き継ぐことになった時も、光栄に思った。

ところが、いざ準備を始めてみると問題が続出。例えば、NGOと結んで何かをやるなら四半期毎に事業資金をNGOに前渡するのが一般的なこの国で、JICA本部はそれと相容れない既存の会計規程をガチガチに運用して先方の理解を得るという指示をしてきた。案の定、ネパール赤十字社はこれを嫌がった。「契約交渉がどうしても不調だったら、事業実施自体を中止することも選択肢として考えておいてもいいか。」と本部担当者に聞いたところ、「なんとか先方の理解を得るよう努力して欲しい。」の一点張り。本部と赤十字社との板挟み状態が2月からずっと続き、3月末を契約締結の締切と指定されていただけに私も焦り、精神的に非常に疲れた。自分でネパールに来て契約交渉やってみると電話で怒鳴ってやりたくなった。

また、NGOを使った地方展開型の事業はモニタリングが非常に困難だ（サンチャイ通信第15号参照）。案件が立ち上がっても、それを担当する所員の負担は相当に大きい。往復だけで2日かかる村に頻繁に出かけねばならない。NGOが与えられた予算を適正に執行しているか帳簿のチェックをせねばならない。さらに、事業が村に与えたインパクトはその村に長く留まらねば見えてこない。今後この種の案件をJICAが増やしてゆくのであれば、規程を含めた実施体制の整備の他に、それなりの人員配置にも配慮すべきだ。

救いは、1月に採用になったばかりのソウラブジー<sup>注1</sup>が赤十字との交渉過程に常に同席しており、私の後に担当する日本人所員が要所を締めれば後は彼がそこそこ動いてくれることだ。彼には参加型農村開発計画手法の知識もあり、この種のプログラムの実施には適任である。また、彼は前任者と違ってフットワークが軽い。もう1つは、ネパール人コンサルタントであるガネッシュ・グルン氏の存在だった。彼は「チサパニ」の基になったJICAの開発調査チームに同行し、「チサパニ」を含む住民防災の全体計画に精通している。赤十字とのパイプも太く、契約の準備では非常によく働いてくれた。

<sup>注1</sup> 「ジー」はネパール語の敬称。「さん」という意味で、私はいつもソウラブ所員のことをそう呼んでいる。

初年度の事業は3月19日にJICAと赤十字社の間で契約が締結され、いよいよ立ち上がった<sup>注2</sup>。賽は投げられた。私は帰国するけれど、残った皆さん、頑張ってね！

年度末、こんな季節に休むなよお・・・

## 私の仕事紹介（その24）

（ある日の山田所員の独り言）

いやあ、ネパール人には困ったもんだ。有給休暇20日は権利だとはいえ、年度末のクソ忙しいこの時期に、なんで慌てて取得するのだろうか。「あれ？〇〇さんは？」「来週まで休み！」「ええっ？」この会話の繰り返しだ。今日は誰かがいない、昨日は誰々・・・入れ替わり立ち替わり誰かが休み、ひどい奴は1週間平気で休みを取る。3月某日など4人同時に休んだ。3月に1週間まとめて休んだ奴は3人もいる。俺だって有休12日も積み残してんのに仕事が忙しくて取ってねーんだぞ。長年事務所働いて、年度末が忙しいことぐらいわかんたが！

有休取るなど言っているわけじゃない。権利なんだから取りたいと言われりゃ「ダメ」と言うつもりはない。でも、なんで暇な時に計画的に取らなかったのか。仕事が暇で新聞読んでた日もあっただろうが。自分の休暇のプログラムもろくに組めない奴が、「プログラムオフィサー」ってな肩書きはないぞ！

新入りのがソウラブジーがいろいろ仕事抱えて休みも取らずに頑張っているのに、近くにいる古株連中がそんなに休んでどうすんだ。タスクフォース<sup>注3</sup>の自分の作業分担分は目途が立っているんだろーな。

\* 毎年年度末になると繰り返されるこの愚行。それを阻止できない日本人スタッフ。ネパールでの3度目の年度末もやはり同じことが起きた。周囲の状況を十分に読めずに平然と権利を主張してくるローカルスタッフの姿を見ると悲しくなる。強権発動して事前に無理矢理でも休ませるべきだったと後悔する。こうして有休を認めた時に限って助けが必要になったりする。いけないとわかっていても、心の中でスタッフの選別をしよう。彼等も悪気があるわけじゃないが、自分の窮状を伝えられなかった至らなさを反省させられる。

<sup>注2</sup> 初年度の契約は取り交わしたものの、平成10年度分契約は4月7日現在締結できる状態にはない。私はむしろ平成10年度分契約の支払条件を危惧しており、平成9年度は懸案先送りの形で取り敢えず契約しただけなので、本当の苦労はむしろこれからだろうと思う。こんな状態で後任（ないしは現有勢力の別の所員）に引き継ぐのは非常に申し訳ない気持ちである。

<sup>注3</sup> 1月に私が中心となって編成した事業広報パンフレット「JICA in Nepal」の改訂作業グループ（座長はナレンドラ・グルン所員）。年度末迄に原稿と写真を揃え、印刷業者に発注をかけるシナリオでタスクを進め、いろいろ紆余曲折はあったものの、なんとか発注にこぎ着けた。私の帰任迄には印刷が出来上がる見込み。2年越しの懸案ただただに、ぎりぎり自分の任期迄に終えられる見込みが立ったのは3月の大きな収穫の1つだった。

3月から、ラリトプール市サネバ地区の我が家の周辺でも、CBO（住民組織）が月100ルピーを住民から徴収してゴミ回収を行なうようになった。この動きは、行政がそれなりの税金を上げている日本の大都市では考えられないことで、住民が自らゴミ問題を認識して立ち上がったということは、活動内容はともかくも良い兆候だと思う。

1月中旬、カトマンズ市とラリトプール市のゴミ捨て場だったゴカルナ廃棄場が、周辺住民の反対で一時的に閉鎖され、ゴミ回収が暗礁に乗り上げる事態が生じた。幸い、住民と地方開発省は補償問題ですぐに合意し、廃棄場は再開されたが、ゴカルナはあと2年で飽和状態になると言われており、これに代わる廃棄場が現在造成中である。

しかし、こうして廃棄場に持ち込まれるゴミはまだ多い。多くのゴミは、市がゴミ用コンテナを設置していない道端にポイと捨てられ、それが即席ゴミ捨て場に発展する。それを拾ってゴカルナに運び込む市のルートに乗れば良いが、中にはそれが市内を流れるビシュヌマティ川やバグマティ川の河原に捨てられ、川に流されているだけというケースもある。ゴミ回収を行なうCBOの中にも、行政組織との繋がりが細く、集めたゴミはリサイクル可能なビン、缶、鉄線等を除いて川に捨てているところは多い。道路のど真ん中で死んだ牛を時々見かけるが、この神聖なる動物の亡骸もまた河原に捨てられる。

3月中旬にネパールを訪れた専門家養成研修（都市環境コース）の受入準備で、カトマンズ市役所を訪れて情報収集する機会があった。現在ゴミ回収を行なうCBOが市内に31団体あり、いずれも住民からいくらかの料金を徴収してリサイクル品目とコンポスト用生ゴミ（肥料として販売）を除いて市の回収ルートに乗せる活動を行なっているようだ。これらCBOの多くは前からあった地域青年団のような団体だったが、市の説得と助言によりゴミ対策に乗り出したようだ。現在のスタピット市長は、有能なブレンにも支えられ、行政と住民組織の連携を密にして、現実的なゴミ政策を打ち出している。ブレンの1人は私の知人だということを知り、住民組織の役割について本まで書いている人物だったので、なるほどと思った。口ばかり達者で外部の援助団体を当てにしていた前の市長とはエライ違いである。

首都圏に住んでいて、ゴミ問題は一体どうなるのかと不安を覚えることが多かったが、カトマンズ市の新たな政策やサネバ地区のCBOの新展開を見るにつけ、皆それなりに考えて良い方向に向かおうと努力しており、たとえ些細な動きでも、ゴミ問題は彼等自身で解決していけるのではないかと希望を持った。この街は少しは良くなってゆくだろう。（浩司）

## Deafの世界もいろいろあって・・・

### ネパール聾啞者団体の内紛

手話を習い始めて2ヶ月が経つが、週1回のレッスンでは覚えるよりも忘れる方が早く、やっぱり実戦で使わないと駄目だと焦りながらも、地方に出て聾啞者と話す機会が全然作れないのを嘆く日々だ。ましてや5月帰国が決まってしまうと、一体何のために手話習っているんだろうと自問自答が始まり、日曜朝を迎えるのが憂鬱だ。それでも、先日聴覚障害者福祉会（WSHI）を訪問して手話のレッスンを受けている学校の先生とちょっとだけ手話で会話できた時は嬉しかった。

そもそもWSHIを訪れたのには経緯があって、2月初頭にここのシュレスタ女史が私を訪ねて来て、JICAがWSHIに資金援助できないかと訴えて来たことに端を発する。聞くところによると、WSHIは、私が手話を習っているロハニさんの所属団体ネパール聾啞者協会（NADH）と同様、デンマークのLBHというNGOから資金援助を受けてきたが、これを6月をもって終了し、継続しないことをLBHが決定したとのこと。理由がNADHの内紛という、WSHIとは無関係のことだったので、十ばひと絡げの理由で援助打ち切られるのは納得が行かないと、シュレスタ女史が流した涙が印象的だった。とはいえJICAが替わりに資金援助するのも難しく、まずは3月来訪予定のLBHのミッションを説得する努力をしてほしい、私は聾啞者団体を今後もいろいろ調べて、日本の聾啞者団体からの支援提供に繋がるよう個人的には努力したいと答えるに止まったのである。

そのLBHのミッションは、空港に到着するなり一部聾啞者グループの抗議行動に遭い、さらに宿泊先のホテルにまで押しかけられてろくに協議もできず、悪印象だけを持って帰国したそうだ。その後、ロハニさんが我が家を訪れた際、疲れ切った表情をしていたので、LBHとの協議は不調だったのだろうと想像はしていた。ロハニさんは性格的に内紛を煽動できるタイプではなく、きっと事態収拾に向けて努力をしたのだろうが、NADHの一部セクトに台無しにされてしまったようだ。

NADH自体、他の障害者団体の内紛でできた団体で、それがまたしても内部の権力闘争で分裂してしまうというのは悲しいことだ。私は日本の障害者団体の事情はよく知らないが、同様の争いはやはり存在すると聞いたことがある。

NADHもWSHIも、活動内容は違えど活動自体はよくやっていると聞く。特にWSHIは、聾学校で手話を使って通常の学校教育カリキュラムを教える教員の育成を行っており、ダランの聾学校に配属されている寺井隊員も、WSHIの活動停止がネパール全体に与える影響はかなり大きいと見ている。NADHは、主たる活動地域がカトマンズ近郊にないので明言は避けるが、なんとか機会を作って実情を見て来たいと思っている。詳細をご期待下さい。（浩司）

## 編集後記

◆任期が残り少なくて、行くべき所はできるだけ行きたいのですが、チサパニ村落開発・住民防災事業の立ち上げのために事務所に居残りになり、2、3月に行くつもりでいた国内出張を全て諦めました。任期終了が近付いて来るのと逆比例して担当業務の量は増え、カトマンズを離れることすら難しくなると実感しました。「チサパニ」のために他の業務を犠牲にしたり、休みがちのローカルスタッフに代わってパンフの原稿を自分でかなり書かされた3月は、自分が期待していた通りには他人が動いてくれず、イライラがつのりました。「チサパニ」の進捗状況は依然芳しくありませんが、4月予定の最後の任国外旅行とポカラ出張まで犠牲にするのはかなわないので、意地でも行きたいと心に誓っています。（浩司）

◆かねてからずっとやりたと思っていた、塀に有刺鉄線を張り巡らせる作業にようやく取りかかりました。しかし、業者が決まってもそこが全部手配するわけではなく、彼は有刺鉄線を張るためのパイプ作りと有刺鉄線を張る作業しかせず、肝心のパイプを塀に取り付ける作業員はこちらで見つけろと言ひ、セメントなど有刺鉄線もこちらで用意しろと言われ、1回で用事が済まず、とても手間がかかります。そもそもこれらを手配するにもどこに行けばよいのかもはっきりわからず、人に聞いたりしながら人や物を集めています。これが日本だったら業者に電話するだけで終わるのに・・・（美澄）